

ハイデルベルク信仰問答より

問 84 聖なる福音の説教によって、天国はどのようにして、開かれたり閉ざされたりするのですか。

答え それは、このようにしてであります。

キリストのご命令によって、真の信仰をもって福音の約束を受け入れるたびに、キリストの恵み深い御業のゆえに、神により真実に、彼らの罪の赦されることが、個人にもまたすべての信仰者たちにも宣べ伝えられ、公にされるとき、天国は開かれるのであります。

反対に、神の怒りと永遠の刑罰は、彼らが悔い改めない間、すべての不信仰者および偽善者の上にふりかかるのであります。

神が両者を、この世と来るべき世で裁くことは、この福音の証によっているのであります。

今日は「説教」の役割について考えさせられる内容です。講壇から語られる説教には、何らかの意味で天国の門を開いたり閉ざしたりする「鍵」の役割があるようなのです。このことを「答え」の内容から読み解いてまいりましょう。

[門を開く役割]

キリストのご命令によって、真の信仰をもって福音の約束を受け入れるたびに、キリストの恵み深い御業のゆえに、神により真実に、彼らの罪の赦されることが、個人にもまたすべての信仰者たちにも宣べ伝えられ、公にされるとき、天国は開かれるのであります。

この長い説明の中で中心になっている事柄は「罪の赦し」です。会衆に向けて語られる説教は、「罪の赦し」を軸としてテキストに沿った内容が語られなくてはなりません。どんなときにも「罪の赦しの福音」がその中核にあるのであって、それが失われたら説教ではなくなってしまいます。しかし、罪の赦しが語られるためには、前提として「罪の認識」が不可欠であるため、罪が何であるかを指し示すメッセージも必要になります。実際、聖書テキストには様々な要素が含まれていて、慰め、励まし、チャレンジ、決断、軌道修正、悔い改め、招き、罪の赦し、祈りの要請、信頼、御霊の満たし、祝福といったメッセージを聞き取ることが求められます。説教者はそのテキストが何を言っているのか (What does this text say?) を読み取り、更にそれが会衆に対して何をしているのか (What does this text do?) を考え、忠実に伝達しなくてはなりません。そこに説教者の先入観や主観を被せることをせず、主が何を語っておられるかに集中する必要がある。しかし、如何なるメッセージであったとしても、ベクトルは常に「罪の赦し」へ向かっているものであり、それが一回の説教の中で網羅されることもあれば、複数回の説教によって段階的に示されていくこともあります。会衆の側は、説教者がこのような作業をしていることを認識するとき、メッセージの聞き取り方が明確になってくるでしょう。そして、聞き取った事柄が生活の中に実現されていくとき、天国が自分に対して開かれていることを確信するようになるのです。

[門を閉じる役割]

反対に、神の怒りと永遠の刑罰は、彼らが悔い改めない間、すべての不信仰者および偽善者の上にふりかかるのであります。

説教には預言的な特徴があるため、語られた福音がある人にとって「つまずき」となる場合があります。罪が指し示されるとき、それに対する反発心が生じることがあるのです。あるいは、語られたことが真理であると受け留めてもそれを実行するには至らないケースもあります。聴衆（説教者を含む）はこの部分において葛藤が生じるのであり、聞いて理解することと実際の生き方との間に乖離があればあるほど、心に「責め」を感じるはずで、説教者自身は誰よりも真理が示されているわけですから、行動が伴っていないならば最も厳しい裁きの対象になることは言うまでもありません。

但し、説教者が特定の人を裁く意図で物事を具体化するのには注意が必要です。苦々しい経験によって傷ついているとき、説教者は対象者を槍玉に上げたくなる誘惑に晒されやすいのです。しかし、そこには悪魔が働いている可能性があるため、できれば第三者にあらかじめ作成した説教を聞いてもらって客観的な視点を与えてもらうことも重要です。そして、できるだけ問題を一般化して「(説教者自身を含め) 誰にでも当てはまること」として伝達していく必要があります。そのようにして語られた説教が真に会衆の心に届くとき、聖霊が働いておられることが分かるでしょう。一般化して語ったにも拘らず「私に向けて語られているのかと思った」という応答をいただくこともあります。それはまさに主がその人に対して語られたに違いありません。しかし、主が自分に向けて語っておられることが心に示されいながら尚も罪のうちを歩み続けるならば、説教はその人にとって「天国の門を閉じる役割」を果たしていることとなります。

神が両者を、この世と来るべき世で裁くことは、この福音の証によっているのであります。

ここで言われている「両者」とは、福音を受け入れる人と受け入れない人のことでしょう。「福音の証」としての説教は、人を立たせることもあれば、つまずかせることもあるのです。

主のもとに来なさい。主は、人々からは捨てられましたが、神によって選ばれた、尊い、生ける石です。あなたがた自身も生ける石として、霊の家に造り上げられるようにしなさい。聖なる祭司となって、神に喜んで受け入れられる霊のいけにえを、イエス・キリストを通して献げるためです。聖書にこう書いてあるからです。「見よ、私は選ばれた尊い隅の親石をシオンに置く。これを信じる者は、決して恥を受けることはない。」それゆえ、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者にとっては、「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」のであり、また、「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らがつまずくのは、御言葉に従わないからであって、そうなるように定められていたのです。(1ペテロ 2:4-8)